Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-19

宮沢賢治の法華信仰

奥村，久美子

(Citation)
国文神戸,3:1-11

(Issue Date)
1979-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481943

宮沢賢治の法華信仰

奥村　久美子

一　国柱会への熱狂

田中智学の日蓮主義に熱狂的に傾倒した賢治は、大正九年「国柱会」に入会、翌十年、日蓮と智学への献身を誓って家出、上京して国柱会館で奉仕活動に従事、その間、「高知尾智耀（智学の高弟）のすすめによって、文芸による大乗仏教の普及を決意し、創作に熱中」（年譜より）同年九月帰郷後、詩作を始め、それらの作品は、十三年、心象スケッチ「春と修羅」・童話集「注文の多い料理店」にまとめられ、自費出版された。

賢治の国柱会体験は、これらの代表作成立・賢治固有の世界成立と、どのようにかかわっているのだろうか。

国柱会創設者・田中智学については、田村芳朗氏の研究が簡潔で要を得ていると思われるので、少し長くなるが引用させていただく。

「かれは、日蓮主義運動は国体宣揚をもって第一要件とすべきであるとの信念をいだき、明治十八年、立正安国会を結成し、その後、日本の国家発揚的な事件がおこると、常にそれに応じていろいろの行事や述作を試みた。たとえば、明治二十二年に帝国憲法が発布されると、憲法講義会を開催し、二十七年に日清戦争がおこると、国祷会を創設し、久遠釈尊すなわち天照大神すなわち日本皇帝と見なし、その日本皇帝が邪法の清国を打ち破ることを祈った。明治三十四年、『宗門之維新』を著わし、世界統一教としての大日本国教の制定、世界万邦の来り礼すべき大戒壇の建立を主張した。『宗門の維新』の言辞は熱気あふれ、激烈をきわめたもので、たとえば日蓮を大元帥とし、『法華経』を剣として、破邪顕正の侵略的折伏に向かい進軍せよと叫んでいる。この書は当時の憂国の志士たち、血気さかんな青年たちの情熱をかきたて、行動の指針として熱狂的に読まれた。

明治三十七年の日露戦争にさいしても、智学は国祷会をおこない、『世界統一の天業』を刊行して出征軍隊に寄贈した。四十三年に『日蓮聖人の教義』を出版、ここでも王仏一体による世界統一戒壇の建立が理想とされている。四十四年には、幸徳秋水の大逆事件における国民的反省について論述し、各方面にくばり、尊王護国の覚醒をうながした。また日本国体学を提唱し、講述した。大正三年、あらためて国柱会を設立、ひきつづき正法確立・国体発揚に獅子奮迅する。」

つまり、智学の思想は、日蓮の戦闘的折伏思想を、明治の天皇制絶対主義に結びつけたもので、「王仏一体論」による天皇崇拝と侵略戦争の讃美を特徴としていた。その影響力は広く軍上層部にひろがり、その門弟から、血盟団の盟主であり五・一五事件の黒幕となった井上日召、満州事変の立役者となった石原完爾等が出ているが、

二十二才の賢治もまた、智学によって熱く情熱をかきたてられた青年の一人であった。

大正七年――米騒動とシベリヤ出兵開始の年――初頭、盛岡高等農林学校地質学専攻生であった賢治は、三月の卒業をひかえて、専門の知識を生かすような、さまざまの事業を夢みて、質屋・古着商を営む父との対立を深めていた。この時期の賢治は、長男として家業をつがねばならぬ運命に対し、必死な抵抗を試みていたのだ。そして全く当突に、彼は軍隊・戦争にあこがれを燃やしてゆく。

シベリヤ出兵の気配の濃厚になってゆく中で、留年して兵役の義務を延期するようにとすすめる父にあらがい、彼は入隊・参戦を志望するが、それは父の真宗に対する法華信仰の主張として展開される。

「懈怠上慢の身を起し誠の道に入らんと願ひ候」「仮令シベリヤに倒れても瞑すべく」「仮令名もなき戦に果て候様見へ候とも私は輝く道に至り、願ひのごとくもなるべく候」「私の信ずるごとくば、今の時念仏して一人か生死を離るべきやと誠に身の置き処も無之次第に御座候」（大正七年父宛書簡）

と、彼は身もだえするように激しく、シベリヤでの戦闘・殺戮に参加したがるのだ。ロシヤ文学を愛読し、ロシヤ革命や革命妨害のための出兵という戦争目的に無知であるはずのない賢治の、この参戦志望を、私は初め奇異に思った。しかも、この時すでに彼は「生きもののからだ」を喰うこと、つまり肉食をやめていたのだ。生きものの悲しみを思って魚さえ食べられない繊細鋭敏な青年が、なぜ戦争という殺し合いの場にあこがれるのか、私は不思議でならなかった。しかし友人宛の書簡には、「世界統一戒壇の建立」とか、「太平洋新文明曙光のとき」というような国柱会の語彙が見られるところから、当時彼はすでに国柱会思想の影響下にあり、その参戦志望は、国柱会のいわゆる「仏道修行」を目的とするものであったことは確かである。

また賢治は、天皇の軍隊を次のように称えた。

「陛下ノマコトノオホミタカラ。
大菩薩タチノ正シイ子孫。
ワガ勇マシイ若イ士官。
グヅグヅノココロヤ、変ナ理屈ヤワケモ判ラヌ悲シミヤ途方モナイウラミヤラハ若イ兵士ノ呼気トナリ汗トナツテミナ日光ニ曝露サレソノ特性ヲミナ失ナハレ七色万色融合スル光明ノ中ニイツカ正シイ勢力ト変ル」

賢治は、智学の「王仏一体論」に深く共鳴していたのであり、天皇の軍隊は煩悩浄化の聖なる道場として、熱い憧憬の対象であった。

天皇と釈迦のために、命を捨てて戦おうと志したのであるが、身体検査の結果、軍隊は賢治の折角の「献身の志」を拒んだ。このあたりの賢治の反応なかなか面白い。彼は軍医から「君は心臓が弱いね。」と言われてムッとする。そして、「酒を飲み、常に絶えず犠牲を求め、魚鳥が心尽しの犠牲のお繕の前に不平に、これを命とも思はずまずいのどうのと言ふ人たちを食はれるものが見てゐたら何と言ふでせうか。」

挫折感にまみれ、彼は研究生として学校に残り、稗貫郡の地質調査に参加した。この経験は、後に稲作指導に生かされるが、当時の

彼には、決してやりがいのある仕事ではなかった。土壌分析などは苦手で、「只無意味なる事を致して心神を労らす事を堪へ難く思ひたるみのに御座候」（父宛書簡）とまで言っている。

彼の希望する職業は、岩石・鉱物など、「諸工業原料の中央に対する売渡の如き」もので、それも「花巻の町にて店を開かざるも差支なき様の商売」であり、東京への野心がありありと読みとれるのである。しかし父は許さず、結局夏ごろには学校をやめて、「当分質屋廃業の残務に手伝ふつもり」（七年九月保阪宛）と家業についたが、「古着の中に座り、朝から晩まで本をつかんでゐるか、利子やもうけ歩合の勘定をするかしてゐます。これが体裁よいことか悪いことか、農業得業士がやってはづかしいことか恥しくないことか……」（保阪宛）と恐りをぶちまけている。

この年の暮れから翌八年二月にかけて、彼は妹トシ（日本女子大在学中）の病気看護のため上京した。この時にも、東京で人造宝石を作り、宝石店を営みたいと訴えている。

「生活も花巻程に骨も折れず、人気もあれ程陰険には無え……」この計画も、父の援助をあてにしていたので、その反対に会うとあっけなくつぶれてしまい、再び店番生活が始まる。

「私は暗い生活をしてゐます。うすくらがりのなかで遥に青空をのぞみ、飛びたちもがきかなしんでゐます。」（八年四月成瀬宛）

家業に身を入れず、のらりくらりしている息子を父は次のようにののしった。

「きさまは世間のこの苦しい中で農林の学校を出ながら何のざまだ。何か考へろ。みんなのためになれ。錦絵なんか折角ひねくりまわすとは不届千万。アメリカへ行こうのと考へるとは不見識の骨頂。きさまはとうとう人生の第一義を忘れて邪道にふみ入ったな。」（八月保阪宛）

「ああ私のからだに最適なる労働を与へよ。」（十月保阪宛）当時の賢治の懊悩はこの一語に尽きる。同郷の先輩が、「こころよく、我にはたらく仕事あれ」とかつてうめいたのと同じうめきを彼もまたヒステリックにもらし続け、そして、「私は燃え出す。本当に燃え出し見せる。」と誓う。生命を燃やして働くことの出来る仕事を求め、二十三才の賢治はもだえ続ける。

「古い布団綿、あかがついてひやりとする子供の着物、うすぐろい質物、凍ったのれん、青色のねたみ、乾燥な計算その他。」（九年三月保阪宛）

彼は店番のかたわら、「蜘蛛となめくぢと狸」など弱肉強食を諷刺するシニックな寓話を書いて、かろうじてうさばらしとしていた垢がついてひやりとする子供の着物をかたに金を貸し、利子を取り立てる時、彼は弱者を喰って肥え続ける蜘蛛を自らに感じていたに違いない。憤懣は内攻し、理由もないのに狂気じみたいかりに取りつかれる。

「私は殆んど狂人にもなりそうなこの発作を機械的にその本当の名称で呼び出し手を合せます。人間の世界の修羅の成他。」（保阪宛）

もはや鬱屈した内面を彼自身によって支えることは不可能になってきた。彼は猛然として国柱会に入会する。

「今日私ハ改メテコノ願ヲ九識心王大菩薩即チ世界唯一ノ大導師日蓮大上人ノ御前ニ捧ゲ奉リ新ニ大上人ノ御命令ニ従ッテ起居決シテ御違背申シアゲナイコトヲ祈リマス。サテコノ悦ビコノ心ノ安ラカサハ申シヨウモアリマセン。コノ上ハ直チニ命ヲ捧ゲル覚悟丈デナク大キナ困難ヲ永ク忍ブカヲ感得シ奉ル為ニモ私モ軍隊ニ入ッタツモリデ毎日ヲ送ッテ居リマス。」（九年七月保阪宛）

「国柱会信行部に入会致しました。即ち最早私の身命は日蓮聖人の御物です。従って今や私は田中先生の御命令の中にだけあるのです。（中略）田中先生に妙法が実にはっきり働いているのを私は感じ私は信じ私は仰ぎ私は嘆じ、今や日蓮聖人に従ひ奉る様に田中先生に絶対服従致します。御命令さへあれば私はシベリヤの凍原にも支那の内地にも参ります。乃至東京で国柱会館の下足番をも致します。それで一生も終ります。」（九年十二月保阪宛）

国柱会入会は、家出のための周到な布石であったかも知れない。それから一か月後の大正十年一月、彼は東京の国柱会本部へ駆けつけるのだが、軍隊が身体検査によって、彼の献身の志を拒んだのと同じように、国柱会は「別段人を募集も致しません。」と、きわめて現実的に彼を門前払いした。

以上大正七年から十年に至る賢治の国柱会への傾倒ぶりを見てきた。淋しさに耐えられない時、「無意識に小生の口に称名の起り申し候」「御心配御無用に候小生はすでに道を得候。歎異鈔の第一頁を以て小生の全信仰と致し候。もし尽くを小生のものとなし得ずとするも八分迄は得会申し候念仏も唱へ居り候」（大正元年一月・盛岡中学在学当時・父宛）と報告していた賢治が法華経を読み深く感動したのは、大正四年・十九才の時のでき事であったという。それがどういう性質の内的体験であったかを私はうかがい知ることができない。ただ外から見える部分、つまり行動面に示された事柄を綜合すると次のようになる。

第一に、法華信仰の固執には、「家」からの自由という強い願望がこめられていたということである。熱心な真宗の信者で、理財の道に明かるく、しかも母の存在を勾わせないほどにも細心な配慮を子供たちに向け、賢治が生涯その庇護の外に出ることのできなかった強力な家父長に対し、彼は法華信仰においてのみ決定的に対立している。彼は、この父に依存しながら、生涯反抗し続けたと言ってよい。

第二に、「私の信ずるごとくば、今の時念仏して一人か生死を離るべきや」とあるように、念仏は個の救済、法華は社会的な救済を目ざすものとされ、日蓮・智学への傾倒によって、国家・社会的な使命感を強くゆすぶられた。しかし、この時期の使命感はきわめて観念的・抽象的なものであり、例えば「世界統一戒壇の建立」とか「太平洋新文明曙光の時」というようなスローガンそのものに、彼は熱く燃えたのである。

「我等と衆生と無上道を成ぜん」「憐れな衆生を救はうではありませんか」など「衆生の救済」を信仰者としての使命とはしていた。しかし、この時期の賢治には、他者は殆んど見えもせず、存在もしてはいなかったのだ。自分自身を扱いかね、一心不乱に題目をとな

え、絶対者との合一を体験することによって、「焦慮悶乱憂悲苦悩」をすべて「輝やく法悦」と化し、夢幻の境地に酔うことが、当時の彼の全信仰であった。「法悦」はきわめて甘美な一体感による陶酔境であったと推察され、燃えることが「法悦」への過程であることにより、彼の信仰は性行動に酷似している。軍隊に、国柱会に彼が求めたものは、燃えることと、一体感に酔うことであった。

家業をいとい、生れた町をきらい、東京にあこがれ、学校で習い覚えたなまはんかな知識で、宝石の人造などというハイカラな事業を起して、東京で一花咲かせようかという、彼自身言うように「山師」的なところのある、しかし当時の地方青年としては、ごくありふれた情熱の持ち主であった。このような賢治の国柱会体験を、青年期独得の一過性の熱狂であったという人がいる。たしかに、燃えることの好きなロマンティックな性向の、しかも不満を内攻させた青年のエネルギーの手ごろな吐け場であった、というべきかも知れない。しかしそこには予期されたような快い発散・充足はなく、蓄積されたエネルギーが、「国柱会」的ではない文学創造へと噴出したことに私は興味を持つのだ。

もちろん、彼は「国柱会的文学」の試みをしている。

ますらをの偉きつとめはわすれはて
ただやすかれとつとむる群は
をのこらよなべてのものかなしみを
になひてわれらとはに行かずや
ひたすらにをみなを得んとつとむるは
まことのつよきをのこのわざか

などであるが、彼は多くを残してはいない。かえって、国柱会は、彼に「負荷」を、どうしようもなく深い罪の意識を背負わせることで、彼の文学の質を決定したのではないか。

智学に煽動されて戦争にあこがれた時、彼はまざまざと殺人を体験したのだ。戦争に出かけ、人を殺し、自分も死ぬかも知れぬと想像しはじめた頃、彼は「生物のからだを食ふのをやめました」という。喰われる魚の怖れや怒りを想像し、「私は前にさかなだったことがあって食はれたにちがひありません。」という。そういうことが、単なる言葉のあやではなく、「ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたない。」（童話集「注文」序）と思えた人であった。賢治は「想像」という言葉を使わず、「感応力」と呼んでいるが、それは魚になり、鳥になり、電信柱になり、草になり、風になり、波になるという、いわば変身の術であったように見えるのだ。

彼はシベリヤでの戦闘を、仏命による「復活の前」の「世界統一戒壇の建立」のための聖なる戦いであると信じ、それに命を捧げ、その使命に献身しようとした。しかし、彼の感応力が描き出したものは、「戦さが始る。ここから三里の間は生物のかげを失くして進めとの命令が出た。私は剣で沼の中や便所にかくれて手を合せる老人や女をズブリズブリとさし殺し、高く叫び泣きながらかけ足をする。」（「復活の前」大正七年二月、校友会誌「アザレア」に発表）というような陰惨なイメージであった。男同士の力と力をぶつけ合う勇壮な戦闘場面ではなく、沼や便所という陰湿な場所で、老人や女――非戦闘員を殺す戦さが予感され感応されたのである。それは一

切の美名をはねつける無辜の虐殺であった。

国柱会体験は、かつてない生命の昂揚感の体験であり、同時に殺人の恐怖の体験でもあったのだ。

「私の世界に黒い河が速かにながれ、沢山の死人と青い生きた人とがながれを下って行きまする。青人は長い手を出して烈しくもがきますが流れて行きます。青人は長い長い手をのばし前に流れる人の足をつかみました。また髪の毛をつかみその人を溺らして自分は前に進みました。あるものは怒りに身をむしり早やそのなかばを食ひました。溺れるものの怒りは黒い鉄の瓦斯となりその横を泳ぎ行くものをつつみます。流れる人が私かどうかはまだよくわかりませんがとにかくそのとほりに感じます。」（七年・保阪宛）

賢治の文学の根底を流れることになるこの地獄の河の源流は国柱会体験以外にはなかったと私は考える。しかも国柱会会員であった彼は、妹の結核死をも自分の責任であると、妹を殺したのは自分であると感じずには居られなかったのだ。

二　妹の死――修羅の意識

大きな権威に抱き取られて魂の平安を得、そこから何か非日常的・ロマンティックな使命を与えられて、熾烈な生命の燃焼感・昂揚感を体験することを夢見て、賢治は国柱会本部に走り込んだのだった。「別段人を募集も致しません。」という国柱会の対応は、このロマンティストの夢をさますのに充分であったろう。

国柱会館で下足番でもするつもりだった彼は、あてがはずれ、下宿を探し、ガリ切りの仕事につくのだが、その時小さな印刷屋の内部を次のように観察している。

「周囲は着物までのんでしまって、どてら一つで主人の食客になっている人やら、沢山の苦学生、弁（ベンゴシの事なさうです）にならうとする男やら大抵は立派な過激派ばかり、主人一人が利害打算の帝国主義です。後者の如きは主義の点では過激派よりももっと悪い。田中大先生の国家がもし一点でもこんなものなら、もう七里けっぱい御免を蒙ってしまふ所です。」

私には、彼が自嘲をこめて「田中大先生」と書いたように思えてならないが、残念なことに、賢治はついに智学と面会する機会を得ず、智学の「国家」がどんなものかを、肉眼で、彼の感応力において確めることはできなかったのである。

「今は午前丈、或印刷所に通ひ、午後から夜十時迄は国柱会で会員事務をお手伝しペンを握みつづけます。」というような生活であったが、奇妙なことに、会の行事・信者のありさまを彼は全く伝えてはいない。そして七月には、「……が私の立場はもっと悲しいのです。あなたぎりにして黙っておいて下さい。信仰は一向に動揺しませんからご安心願ひます。そんなら何の動揺かしばらく聞かずに置いて下さい。」（関徳弥宛）と同信の友に訴えている。動揺とは国柱会活動についてのもので、信仰とは法華信仰を指すと私は考える。この手紙には原稿を売ろうとしていることなどが照れくさそうに書かれ、「これからの宗教は芸術です。これからの芸術は宗教です。（中略）今日の手紙は調子が変でせう。斯う云ふ調子ですよ、近頃の私は。」と結ばれている。

このあたりに、いわゆる「高知尾智耀のすすめによって、文芸による大乗仏教の布教を決意」という事件があったに違いない。そして、もうこのあたりで、賢治が当時すでに国柱会の現実に幻滅していた、もしくは、国柱会活動に燃える情熱を失っていたと断定してもいいだろう。

この年の夏、東京の下宿で、彼は孤独であり、空虚であり、冷えきっており、しかも、ふるさとの土を踏めば治るといわれた脚気を病んでさへいた。そして八月の書簡には、北上山地への強い慕情が著され、八月二十五日には、「かしはばやしの夜」（童話集「注文」所収）が書かれた。この作品において、賢治は「赤いシャッポの絵画き」という都会風自由人の装いで、なじみ深い岩手の山に回帰し、年経てしかも幼ない柏の樹霊たちの夏の祭りに参加して、とめどなく歌いかわし、おどり騒ぐ。彼の心は「イーハトヴ」――「ドリームランドとしての日本岩手県」の野や山に向って耐えがたく燃え始めたのだ。

イーハトヴ民話の起爆力になったものは、大乗仏教布教の情熱であるよりも、都会の孤独であったと私は考える。賢治は、夜を徹して、柏やふくろうや山猫や狐、純情で少しずるく、たくましくて愛嬌のある古なじみたちと、歌いかわし、きがねなくしゃべり、まどろんでは「鹿踊り」の夢を見るという状態だったのだ。

ふるさとの野や山や空への幻想の旅立ちは国柱会に背を向けることであった。賢治は、軍隊に国柱会に求めて果さなかった、昂揚し、一体化し、歓喜に至るという願望の充足を四次元空間・幻想の世界に求めはじめたのだ。童話集「注文」所収の短篇作品は、人が山にはいり不思議を体験するという形のファンタジーである。山や野原や太陽や風や吹雪の描写の美しさが、この作品集の大きな魅力となっている。童話集「注文」は、木と鳥と人が共に歌い踊り陶酔する世界であり、そこでは、鹿もすすきも人も、個としての形を失ない、星雲のように輝く一つの生命感に融合する。童話集「注文」は、まず自然に対する深い感動であり、その中に、共に生きていることへの歓喜の歌・生命の讃歌である。

この作品集の美しさを支えるものは、「けれどもわたくしは、これらのちひさなものがたりの幾きれかが、おしまひあなたのすきとほったほんたうのたべものになることをどんなにねがふかわかりません。」（大正十二年十二月童話集「注文」序）に見られるような、他者の、いや生き物全体のしあわせのための、つつましくも真摯な祈りにほかならない。この祈りに到達するためには、つまり賢治固有の世界が成立するためには、国柱会からの脱落・ふるさとへの熱い希求だけでは充分ではなかった。彼は、彼の信仰と文学を理解し、彼の感化によって法華に改宗していた、いわば唯一の理解者・支持者であった妹トシを失わねばならなかった。

彼が東京の下宿で「かしはばやしの夜」を書いていた頃、トシの病状が悪化し、九月彼は帰郷している。家族が法華に改宗しない以上帰らないという誓いを立てていたのだから、肉身の愛にひかれての帰郷は、きわめて後めたいものであったに違いない。そして同年十二月、創設間もない稗貫農学校へ就職したが、親友宛の手紙には。「何からかにから、すっかり下等になりました。（中略）それがけれども人間なのなら、私はその下等な人間になりまする。」とある。

彼の価値判断では、国柱会への献身的活動は上等で、教師という日常的な職業につくことは下等なことだったのだろう。しかし、彼の強いはにかみぐせを考えると、「その下等な人間になりまする。」という言い方には或種のきびしい自負がこめられていたと言えそうである。

同じ頃書かれたと思われる「冬のスケッチ」には、「げにもまことのみちはかがやきはげしくして行きがたきかな行きがたきゆゑにわれとどまるにはあらずおおつめたくして呼吸もかたくかがやける青びかりの天よかなしみに身はちぎれなやみにこころくだけつつなほわれ天を恋ひしたへり」とあり、私はこれを、国柱会体験に対する反省であったと考える。彼は国柱会を批判的に抜け出したのではない。(彼は終生会員であり、王仏一体論から自由ではなかった。)あくまでそれは「まことのみち」であるのだが、「行きがたく」脱落したのである。しかし至高のものへのあこがれはやみがたく、彼はそのまなざしを、智学の指さす、「久遠釈尊すなわち天照大神すなわち現天皇」や日蓮へではなく、直接「天」にむけ、太陽を讃美する。

「日光をおくりまし
　にがきなみだをほしたまへり
　さらに琥珀のかけらを賜ひ
　念りの青さへゆるしませり」(「冬のスケッチ」)

と彼が太陽をたたえる時、それは「ああこの人はとうとうはてなき空間のただけしの種子ほどのすきまものこさずその身をもって供養した」「そらや愛やりんごや風すべての勢力(エネルギー)のたのしい根源」と呼んだ釈迦のイメージと完全に一致している。智学流に言うならば、久遠釈尊すなわち太陽である。

彼の生きる世界は、にわかにくっきりした輪郭を持ち始める。それは上部に太陽を中心にした天をいただく「気圏の底」である。光と熱、雨と雪、風は天からきて、「底」の生きものをはぐくむ。山は天を指さし天に触れる部分である。

「ちり落り来り
　雪となりてつちにつむ
　にっぽんなどとよばれたる
　この気圏のはなれがたし」(冬のスケッチ)

「そらしろびかり
　くるみとは
　げにもあやしき
　気圏の底のいきものなるかな」

「そらの椀
　ほのぼのとして青びかり
　気圏の底にすぎとなづくる」

そして彼もまた「気圏の底」に日を浴び天を恋いしたう生き物の一つであった。

彼は農学校教師として、明かるい春の太陽の下で、生徒たちと共に、生きものを育てる楽しい作業に従事する喜びを、「くづれかかった煉瓦の肥溜の中にはビールのやうに泡がもりあがってゐます。さあ順番に樋に汲み込もう。そこらいっぱいこんなにひどく明るくて、ラジウムよりももっとはげしく、そしてやさしい光の波が一生

けん命一生けん命ふるへてゐるのに、いったいどんなものがきたなくてどんなものがわるいのでせうか。もうどんどん泡があふれ出してもいいのです。青ぞらいっぱい鳴ってゐる、あのりんとした太陽マヂックの歌をお聴きなさい。」（「イーハトーボ農学校の春」）と歌っている。

質屋・古着商の父と争い続け、求めてやまなかったやりがいのある仕事に、彼はどうやらめぐり合ったのだ。生徒は賢治にとって、夜の東岩手山をともに歩き、「イギリス海岸」で化石を見つけ、「ポランの広場」や「植物医師」「饑餓陣営」をともに演じ、感動して乱舞する仲間だったのだ。

春の日を、「光炎菩薩太陽マヂック」とたたえ、思わず笑みこぼれるのは生命の一つの様相であり、彼はそれを歌うと同時に、もう一つの生命感の表現にむかう。

「心象のはいいろはがねから
あけびのつるはくもにからまり
のばらのやぶや腐食の湿地
いちめんのいちめんの諂曲模様」（「春と修羅」十一年四月八日）

うねうね、ずるずる、べとべと、くねくねしたもの、不吉に伸びひろがる気味悪いもの、これが「修羅」の住み家であり、もう一つの生命感である。

「いかりのにがさまた青さ
四月の気層のひかりの底を
唾し　はぎしりゆききする
おれはひとりの修羅なのだ」
「ああかがやきの四月の底を
はぎしり燃へてゆききする
おれはひとりの修羅なのだ」

繰り返して昂然と主張される、この修羅宣言は一体何だったのだろう。軍隊にあこがれた時も、国柱会の闘士たらんとした時にも、彼は「修羅」だったではないか。

日蓮や智学への献身を誓う時、彼には法華の行者という甘美な自負があった。今、それから脱落して、「下等な人間」になっているのである。

「おれは一人の修羅なのだ」

この昂揚した叫びは、国柱会的法華の行者にはなりそこねたが、何者かであろうとする賢治の自己確認であり、自己主張であったろう。それは邪悪なエネルギーに満ち溢れてはいるが、聖い日を浴びて美しい花を咲かせることのできる主体である。「修羅」は、国柱会的ではない何かを模索している新たな信仰主体であり、例えば、大将の勲章をむさぼり喰って兵士の全員が生き残るという「饑餓陣営」の野太いユーモアを支えるものであった。

その年十月、彼はトシを失なう。

「ああ巨きな信のちからからことさらはなれ
また純粋やちひさな徳性のかずをうしなひ
わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき
おまへはじぶんにさだめられたみちを
ひとりさびしく往かうとするか

信仰を一つにするたったひとりのみちづれのわたくしが
あかるくつめたい精進のみちからかなしくつかれてゐて
毒草や螢光菌のくらい野原をただよふとき
おまへはひとりどこへ行かうとするのだ」

（11・11・27「無声慟哭」）

「どうしてそれらの鳥は二羽
そんなにかなしくきこえるか
それはじぶんにすくふちからをうしなったとき
わたくしのいもうとをもうしなった
そのかなしみによるのだが」　（12・6・4「白い鳥」）

妹の死は、国柱会からの脱落という彼の罪の報いのようにやってきたことによって、いっそう悲痛であったのだ。

青森挽歌・オホーツク挽歌を生み出す一連の旅は、失われたトシを探す旅であり、失われた自らの信仰を模索する旅であった。

「とし子はあの青いところのはてにゐて
なにをしてゐるのかわからない」
「わたくしの感じないちがった空間に
いままでここにあった現象がうつる
それはあんまりさびしいことだ」
「われわれが信じわれわれの行かうとするみちが
もしまちがひであったなら
究竟の幸福にいたらないなら
いま　まっすぐにやってきて
私にそれを知らせて呉れ」（12・8・2）

トシは、もうどんなに呼びかけても共感の不可能な世界へ去ってしまったのだ。そして彼は、それが決して「医される筈のない悲しみ」であることを悟る。

「東京の避難者たちは半分脳膜炎になって
いまでもまいにち遁げて来るのに
どうしておまへはそんな医される筈のないかなしみを
わざとあかるいそらからとるか
いまはもうさうしてゐるときでない」（12・9・16）

医される筈のない悲しみを抱いて、彼は風や波の「語り」に深く耳をかたむける。大昔から生き、人間よりも永遠の側にいる山や石や木の「語り」に耳をかたむけ、「みんなむかしからのきやうだい」であることを得心する。

「チユンセがポーセをたづねることはむだだ。なぜならどんなこどもでも、またはたけではたらいてゐるひとでも、汽車の中で苹菓をたべてゐるひとでも、また歌ふ鳥歌はない鳥、青や黒やのあらゆる魚、あらゆるけものも、あらゆる虫も、みんな、みんな、むかしからのおたがひのきやうだいなのだから。チユンセがもしポーセをほんたうにかあいさうにおもふなら大きな勇気を出してすべてのいきもののほんたうの幸福をさがさなければいけない。」（手紙4）

これは、「医される筈のない悲しみ」への一つの結論であり、ここからまっすぐに「羅須地人協会」への道が開ける。

国柱会からの脱落・妹の死・挽歌の旅・大正十年からの二年間は、賢治の生涯のうちで、魂の振巾の最も大きかった時期であり、心象

スケッチ・「春と修羅」第一輯・童話集「注文」所収の作品が書かれ推敲されてゆく過程であった。彼は共生の喜びを激しくゆるぎないものにするため、表現の工夫を重ねたに違いない。そして、「おしまひ、あなたのすきとほったほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません。」という童話集の「序」が書かれたのは大正十二年十二月、トシの死から一年後のことであった。

論文執筆者紹介

執筆順

奥村　久美子	昭和三十　年卒業
林　廣親	昭和五十　年卒業
田村　欽一	昭和三十一年卒業
長澤　漣	昭和三十二年卒業
安達　隆一	昭和三十四年卒業
甲斐　睦朗	昭和四十八年卒業（大学院）
仁田　義雄	昭和四十六年卒業
小林　祥浩	昭和三十六年卒業
樋口　元巳	昭和四十　年卒業
浅田　修一	昭和三十七年卒業
河田　光夫	昭和三十七年卒業